

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 4 月 18 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520393

研究課題名(和文)メヒティルト・フォン・マクデブルク『神性の流れる光』の思想的、社会的背景について

研究課題名(英文)The ideological and social background of "The Flowing Light of the Godhead" by Mechthild of Magdeburg

研究代表者

狩野 智洋(Karino, Toshihiro)

学習院大学・付置研究所・教授

研究者番号：90329003

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円、(間接経費) 360,000円

研究成果の概要(和文)：中世ヨーロッパに存在したベギンと呼ばれる半僧半俗の女性達の一人であるメヒティルト・フォン・マクデブルクの『神性の流れる光』の思想的、社会的背景を探ることを目的とした。

ベギンは11世紀に始まった教会改革に端を発した中世の宗教運動の流れの中で生まれ、病人の看護や死者のための取りなしの祈りを神に捧げることを重要な仕事としていた。メヒティルトの『神性の流れる光』は個人の魂を「キリストの花嫁」と見る考え方に立ち、自らの神秘体験や聖俗両界の人々に対する警告や励まし等が述べられているが、そこには彼女独特の内容と並び、他者からの少なからぬ影響も見られる。

研究成果の概要(英文)：I researched the ideological and social background of "The Flowing Light of the Godhead" by Mechthild of Magdeburg who was one of the beguines.

Beguines were women who led lives of religious devotion without joining an approved religious order. The movement began in the stream of the religious movements in the Middle Ages that were brought about by the reforms of the church begun in the 11th. century. Taking care of the invalids and the prayer for the dead were their important duties. In "The Flowing Light of the Godhead" based on the idea of the soul as the bride of Christ, Mechthild expresses her mystical experience, warn and encourage both the clergy and the laity. There are not only her originalities but not a little influence of others.

研究分野：ドイツ文学

科研費の分科・細目：基盤研究(C)

キーワード：メヒティルト・フォン・マクデブルク 神秘主義 ベギン 中世の宗教運動 煉獄 オリゲネス ベルナルド・ド・クレルヴォー

1. 研究開始当初の背景

メヒティルト・フォン・マクデブルクを含む中世ヨーロッパの女性神秘主義研究はフェミニスト研究の一部として始められた。それまで無視されていた女性神秘主義者に注目したという功績は評価されるべきではあるが、その後それに対する批判から、より中立的な立場からの研究が、女性のみならず男性研究者によっても行われるようになった。しかし、『神性の流れる光』については思想的、社会的背景を余り考慮しないテキスト中心の研究が専ら行われていたため、時代的、地域的に比較的広い範囲での、その背景を、中心に据えた研究が必要であると考えた。

2. 研究の目的

メヒティルト・フォン・マクデブルクの『神性の流れる光』の思想的、社会的背景を、比較的広い範囲で、可能な限り明らかにすることにより、メヒティルトの思想の独自性とこのテキストの特徴をより明確にすることを目的としている。

3. 研究の方法

メヒティルトが生前、ベギンと呼ばれる、修道院に属さないながらも宗教的な生活活動を送っていた、半僧半俗の女性達に属していたため、まずはベギン発生の歴史的・社会的背景を研究し、かつ残された資料から、できる限りその生活の一端を把握することを試みた。ついで、『神性の流れる光』から読み取ることの出来る思想をオリゲネスやグレゴリウス一世、ベルナルド・ド・クレルヴォー等の『雅歌解釈』や、その他の類似の思想と比較することで、メヒティルトの『神性の流れる光』に独自の思想を浮き彫りにするという方法をとった。

4. 研究成果

ベギンの発生に関し、当初は、主として十字軍の影響により男性人口が極端に減少したため、中世社会において女性人口が男性人口を上回っており、そのため結婚をあきらめざるを得なかった女性達が集団生活を始めたことに由来する、という仮説を立てて研究を始めた。しかし、研究が進むにつれて中世の都市において必ずしも女性人口が男性のそれを上回っていたとは言い切れず、都市や時代によってはその逆の例もあったこと、また、ベギン達がベギンとしての生活を始めた理由も、経済的理由よりも寧ろ宗教的情熱に求め得るという点が明らかとなってきた。更に、ベギン運動を単独で論じるのではなく、その発生も含めて、中世ヨーロッパの大きな宗教運動の中の一つの潮流としてとらえるべきであるということが分かった。

中世の宗教運動は恐らく 11 世紀の教皇グレゴリウス 7 世に始まるカトリックの教会改革にその発端を見ることが出来る。彼の教会改革の二本の柱は聖職売買の禁止と聖職

者の妻帯禁止であった。聖職売買の禁止には世俗権力が聖職者を任命する権利(叙任権)の否定も含まれていた。そのため、教皇側と王侯貴族達及び彼らによって叙任された聖職者達の激しい対立をもたらした。この時、グレゴリウス 7 世が「使徒的生き方」をする者こそが「使徒の継承者」であるとして、聖職売買によって聖職者の地位を得た者や妻帯する聖職者を批判した。

教皇庁と世俗権力との抗争の過程で、本来聖職に就く資質のない者が聖職売買によって聖職に就くことが一般信徒にも問題視されるようになり、「使徒的生き方」をする者こそが「使徒の継承者」である聖職者なのだ、という思想が一般に広まることとなった。この流れが『神性の流れる光』にまでも続いており、その中ではキリストの教えに背く聖職者達に対し、批判の言葉がしばしば向けられている。

そこから、聖職売買によって聖職に就いた者からの聖体拝領の拒否や、使徒的な生き方をし、説教を行う者も信徒達の中に現れ、異端派を形成するようになった。12 世紀に入って教会を批判し、靈性に重きを置くカタリ派が南フランスと北イタリアに興ったが、彼らは自ら典礼書を記し、司教区を置き、教団を組織した。12 世紀後半には清貧の厳守を旨とするヴァルド派がフランス語に翻訳した聖書に基づいて説教を行い、民衆の支持を得た。また、13 世紀初頭には後に教皇によって公認されるフランシスコ会が生まれ、清貧とキリストの模倣に専心し、説教活動を行った。この様に信徒達が自ら説教を行う風潮が一般に広まったことによって、メヒティルトのような聖職に就いていない者が神学的内容を含む事柄について語ることにに対する一般の抵抗感を弱めたと言える。

一方カトリック教会側からは 13 世紀初めに、語りは等の異端派に対抗する形でドミニコ会が創設され、説教と「使徒的生き方」を實踐して異端者の回心をはかった。この托鉢修道会である、ドミニコ会とフランシスコ会が後に、ベギン達の司牧を担い、彼女たちを導くこととなる。メヒティルトの司牧もドミニコ会士であった。

ベギン運動が発生したのもこうした社会的潮流の中であった。そのため、ベギンもしばしば異端派と見なされたが、ベギンを一様に異端とすることは出来ない。そもそも一言でベギンとは言っても地域や時代により、またベギン各個人によってもその有様が大きく異なっており、メヒティルトのような神秘家もいれば、身を持ち崩して世間の非難を浴びる者もいた。また、当初は自発的に清貧生活を望んだ貴族出身者が大半を占めていたが、時代を経るに従って貧しい家庭の出身者で、安定した生活を目的としてベギンとなる者が増え、そのため入所者を制限するベギン会も現れるようになった。この様に、様々なベギン達の中には教会の視点からは異端と

されるような思想に傾倒する者が現れたとしても不思議ではない。だが、メヒティルトもそうであったが、寧ろおしなべて教会には忠実で、異端とは距離を置いていたようである。しかし、彼女たちに対する教会の立場が二転三転したことから推測できるが、異端に属する女性信者とベギンとを判別することは難しく、ベギンではない異端信者をベギンと見なして、ベギンを異端派と見なす例も少なくはなかったようである。ここには当時にもベギンの定義が曖昧であったことが関係していよう。メヒティルトも『神性の流れる光』の中で異端派を厳しく批判しているが、彼女自身が生前異端の嫌疑を掛けられていた。

中世の宗教運動に関しては、以上述べた点に加え、「煉獄」に対する恐れも大きく作用したのではないかと筆者は考えている。特にベギン達の重要な任務の一つに、死者のための取りなしの祈りがある。生前大罪を犯さなかった靈魂や罪の償いを果たさなかった靈魂は天国に行く前に煉獄で罰を受けて清められるが、生者の取りなしの祈りによって、苦しみが軽減されたり、期間が短縮されると信じられていた。この「煉獄」が宗教運動の隆盛に少なからぬ影響を与えたのではないだろうか。『神性の流れる光』にもメヒティルトが神に取りなすことで、煉獄で苦しんでいる魂を救うことが度々描かれている。

『神性の流れる光』がオリゲネスやベルナルド・ド・クレルヴォー等前人の『雅歌』解釈の影響下にあることは確実である。「キリストの花嫁」を教会よりも、寧ろ個人の魂と見なす点に、この二人の『神性の流れる光』に対する影響が認められるが、しかし、メヒティルトが彼らの著作から直接影響を受けたと言うよりは、既にこの考え方が広く流通しており、彼女も自然にその立場に立っていたと考える方が妥当であろう。つまり、直接的な影響ではなく、間接的な影響を受けたと考えられる。教会をキリストの花嫁に見立てる従来の解釈に対し、個人の魂をキリストの花嫁とする解釈を初めて提示したのがオリゲネスであるとされ、キリストの花嫁としての個人の魂とキリストの結合というテーマに立って雅歌解釈を行ったベルナルド・ド・クレルヴォーの説教はつとに有名であり、メヒティルトがその説教の詳しい内容は知らなくとも、その大まかな内容を伝え聞いていたと考えることは妥当である。

また、メヒティルトが前人の『雅歌解釈』の影響を受けているとは言っても、『雅歌』を独自に解釈しようとしたわけではない。寧ろ「キリストの花嫁」としての個人の魂、個人の魂の神に対する愛、という考えに基づいて、メヒティルト自身の『雅歌』を書くことを当初の目的として、『神性の流れる光』を書き始めたのではないかと筆者は考えている。言い換えれば、『雅歌』の形式を利用して自らの神秘体験を表現しようと試みたの

ではないか、と考えている。

更に、前述のようにドミニコ会がメヒティルトとその属するベギン会を司牧していたため、その修道士の説教等を通じて種々の影響を受けたことが指摘され、また、他の神秘主義者との関連性も指摘されているが、それは広範囲に及ぶため、研究成果をより充実したものとするため、今後も更に研究を進める予定である。

以上の成果は、今後5回程度に分け、主に雑誌論文の形で発表し、最終的には一冊の本にまとめて出版する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)
狩野智洋 「メヒティルト・フォン・マクデブルクの『神性の流れる光』の社会的背景(1) - 教会改革と中世の宗教運動 - 」(仮題)
(『言語文化社会』第13号 学習院大学外国語教育研究センター 2015年3月 掲載予定) 頁数未定

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

狩野 智洋 (KARINO TOSHIHIRO)
学習院大学外国語教育研究センター 教授
研究者番号：90329003

(2)研究分担者 ()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：